

令和四年度新宿区夏目漱石コンクール わたしの漱石、わたしの一行

中学生の部 最優秀賞

僕の聖地、牛込界隈

暁星中学校 2年 澤田 憲

作品名『一夜』

選んだ一行 人生を書いたので小説をかいたのではないから仕方がない。

漱石の作品を読むと、牛込界隈の風景が不意に現れ、妙な気分になる。『吾輩は猫である』に出てくる「首懸けの松」は外濠の土手の上で、『行人』の「雅楽稽古所」は飯田橋駅の側で、どちらも僕の通学路に近い。『明暗』の「キッドの靴」や「仏蘭西（フランス）語の読本」は、僕が卒業した小学校を彷彿とさせる。神田川沿いを歩く時、『それから』の三千代にふと出会うように緊張する。もとより虚構だが、舞台が実在するとリアリティが増す。アニメ等の聖地巡礼が流行るのもうなずける。

『一夜』の舞台は八畳の座敷で、南西に「鉄牛寺」がある。牛込界隈にこの名の寺はない。だが僕は寺内（じない）と呼ばれた神楽坂五丁目辺りかと思う。本文中に「東隣で琴と尺八を合わせる音」とあり、花街特有の路地を連想するからだ。『一夜』は「朦朧として取り留めがつかない」と、作中作として卑下する場面が『猫』にある。でもこうして場所を絞ると、ヒントが合いより鮮明になる。男女三人の掛け合いが細かな仕草とともに映し出され、ドキュメンタリー映画を見ている感覚になる。

最終段落は、まさに映画のエンドロールで、四つの問答が示される。その三番目で「三人の言語動作を通じて一貫した事件が発展せぬ？」と唐突に切り出し、それに応えて「人生を書いたので小説をかいたのだから仕方がない」と気を吐く。不遜だが率直な物言いにも聞こえる。『倫敦（ロンドン）塔』では後書きを添え、『幻影の盾』では前書きを載せ、本文の枠外で執筆動機などを補足した。作家デビュー間もない不安がそうさせたのか。だが本作では本文末尾に配置した。この変化が興味深い。

そもそも「人生を書いた」とはどういうことか。高浜虚子は『漱石と私』の中で、連句などが創作熱を煽る口火になったと回顧している。僕ははっとした。三人の掛け合いを読み直す。ああ、これは句を付けているのだ。三人は連衆（れんじゅう）で、「美しき多くの夢を」と吟ずるが、雨などの事物に刺激され詩興を動かし、付け筋を楽しむ。漱石は執筆（しゅひつ）役で、客観的に記録するが、三人が寝入ると視点は全知的になり、「凡てを忘れ」「太平に入る」と呟き、人生観を語って、例の四つの問答で締める。

英国帰りの文学者だが、相変らず英語教師のままでくすぶる中、仲間の励ましで連句を巻く。すると言葉が溢れ出る。『一夜』には、表現や生き方に懊悩し、身をよじって寝転ぶ漱石がいる。人生

を「一貫した事件」として扱う小説に憤り、連句や自分語りで表現を試みる。同時に「己れを斯く」ことなく生きようと自戒する。『一夜』から一年後、『猫』の最後も「太平に入る」と結び、『草枕』でも「凡てを忘却してぐっすり寝込むような」詩味を礼讃する。二年後、ついに職業作家となる。思えば連句は巻戻しを禁じ、後戻りできない人生に喩えられる。博士や教授の名利を断つが、逸民となるまでは突き抜けない。

やはり『一夜』の舞台は起伏の多い神楽坂が相応しい。また一つ、僕の聖地ができた。